

〔翻 訳〕(Übersetzung)

フォルクマル・ハンゼン トーマス・マン『魔の山』

ハンス・カストルプの戸外/開かれた世界への道,

あるいは時の小説としての『魔の山』(1)

(解釈叢書『20世紀の長篇小説』第1巻

フィリップ・レクラム社 55-69ページ所収)

六 浦 英 文 訳

トーマス・マン(Thomas Mann)の長篇小説の中で、その影響力の歴史を通してアクセスするのに特に適しているのは二作品だけである。『魔の山』(*Der Zauberberg*) (1924年)と『ファウストゥス博士』(*Doktor Faustus*) (1947年)がそれである。この二つの長篇小説は、ドイツでは、刊行直後に、相反する立場から、熱気を帯びた論争の対象となった。両作品とも、現在に至るまで、数多くの新タイトルで二次文献のリストを充実させてきている。その中で見えてくる挑発する性格は、時の小説〔時代小説/時間小説〕(*Zeitroman*[])の開かれた知性にもとづくもので、この時の小説は、読者が現在とじかに対峙するときや、未来を見据えて、恐れたり希望を抱いたりするときに体験することを取り上げるものなのだ。『ヨセフとその兄弟たち』(*Joseph und seine Brüder*) (1933-43年)の四巻本とゲーテ(Goethe)小説『ヴァイマル〔ワイマル〕のロッテ』(*Lotte in Weimar*) (1939年)は、著者の亡命状況のせいであるとはいえ、この種の直接的緊急性を得ることができなかった。大衆向きの『大公殿下』(*Königliche Hoheit*) (1909年)と『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(*Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull*) (1922/1937/1954年)は、根本的な意味で、思想的な立場や意見を対極化させる働きはなかった。一方、恩寵-小説(*Gnaden-Roman*)『選ばれし人』(*Der Erwählte*) (1951年)は、歴史的な知識を必要とする言語諸要素(*Sprachelemente*)のせいであるとはいえ、大衆に受け入れられる影響力に欠けていた。『ブデンプローク家の人々』(*Buddenbrooks*) (1901年)でさえも、異なる運命を体験した。処女長篇小説として、最初はゆっくりと、ほかの作品と同じような評価へ、しかし知的な刻印をほとんど帯びていないという評価へと成長した。これに加えて、『魔の山』によって、トーマス・マンの世界的名声は保証された。ヘリン・トレイシ・ロウ＝ポーター(Helen Tracy Lowe-Porter)の翻訳『魔法の山』(*The Magic Mountain*) (1927年)が、マンをアメリカのベストセラー作家にし、この小説が、マンに1929年度のノーベル賞をもたらした——ただし、授与理由を示す文書には、もっぱら、『ブデンプローク家の人々』にしか言及されていないのだが——、『魔法の山』(*La montagna incantata*) (1930年)の

セテンプリーニ像によって、イタリアとの特別な関係が樹立される。モーリス・ベッツ (Maurice Betz) によって達成された『魔法の山』(*Montagne Magique*) (1931年) 像によって、作家マンは、フランスで認知されることが最終的に確定する。

意見や思想を対極化させるドイツ語の作用力の特性を正しく理解するために、1924年11月末から、さしあたって二巻に分けて出版されたこの重厚な小説が引き起こしたセンセーショナルな成功について詳細に論じるのではなく、基本的なトーンとそのヴァリエーションを反映する私信に書き留められた、さまざまな立場について触れてみたい。

左翼の雑誌『ヴェルトビューネ〔世界舞台〕』(*Weltbühne*) の編集者ジークフリート・ヤーコプゾーン (Siegfried Jakobsohn) のトーマス・マンに対する距離は無視できない。『幼な児の歌』(*Gesang von Kindchen*) をからかい (1919年7月12日)、マンの中に、ドイツにおいて競合する相手のいない「笑うべき気取り」(*lächerliche Präziöse*) を見て取り (1926年4月30日)、あるいは、こう提言する。「トーマス・マンには、大きな反駁論文を書く値打ちもない。ときおり、論難して、平手打ちを食わせるだけでよいだろう。ホリッチャー (Arthur Holitscher) 賛歌で増幅して」(*Th. M. lohnt keinen großen Gegenaufsatz. Nur gelegentliche Angriffe und Backpfeifen. Verstärkt durch Hymnus auf Holitscher*) (1926年5月11日)¹⁾。にもかかわらず、1925年に出された、編集者の目線からの何通かの書簡が示すように、ヤーコプゾーンの評価はつねに率直である。7月3日には、こう尋ねている。「君は『魔の山』を知っているかい。本当に面白い小説だ。ところが、才能よりももっと驚くべきことは、こんなものを仕上げる忍耐のほうだ。」(*Kennst Du eigentlich den ›Zauberberg‹? Ein wirklich lustiger Roman. Und fast noch erstaunlicher als das Talent die Geduld, die sowas fertigbringt.*) 7月7日、ヤーコプゾーンは、トゥホルスキー (Kurt Tucholsky) によるマンへの評価を「不当だ」(*ungerecht*) 感じ、その二日後に、「『ブデンプローク家の人々』を書いた男」(*Mann der Buddenbrooks*) に言及した一節を完全に削除しようとするのだが、そのとき、その根底にある尊敬の念を無視することはできない。「1200ページに及ぶ言語に絶する忍耐を費やした書物を、なぜ120ページで面白がってはいけなのだろうか? 『魔の山』は確かにそうなのだ。『ブデンプローク家の人々』と同列に語るの、もちろん、神への冒涇だろう。『ブデンプローク家の人々』の最も弱いページが、ここでは最高のページの上にそびえ立っている。しかし、もちろん君は読む必要はないだろうが。」(*Warum soll ein Buch, das auf 1200 Seiten zu bringen unsägliche Geduld gekostet hat, nicht auf 120 Seiten amüsant sein? Und das ist der ›Zauberberg‹ bestimmt. Ihn mit den ›Buddenbrooks‹ in einem Atem zu nennen, wäre freilich Gotteslästerung. Deren schwächste Seiten stehen turmhoch über den besten hier. Aber lesen mußt Du selbstverständlich nicht.*) ヤーコプゾーンは、7月14日、同じことを繰り返しながら、この判断を前よりも和らげ、同時に自分とトゥホルスキーの読書に対する印象を伝えている。『『魔

1) [原注] Siegfried Jakobsohn, *Briefe an Kurt Tucholsky. 1915–1926*, hrsg. von Richard von Soldenhoff, München/Hamburg 1985. 1925年6月2日、『ヴェルトビューネ』誌に、ハンス・ライジガー (Hans Reisiger) の、マンについての非常に高い書評が掲載されている。(810ページ以下)

の山』を〈もう一度〉読みたいというのは本気かね？ 僕は、一度、六週間かけて大変な努力を払って読んだが、最終的には1200ページのうち120ページが価値あるものだったという感想を持った。もしこのことを事前に知っていたら、僕の貴重な時間を1ページ1ページ価値のあるさまざまな本に費やしただろう。しかし、人生で再びこの本を開くことは金輪際ないだろう。君の忍耐に敬意を表します。」(Ist das Dein Ernst, daß Du den *Zauberberg* ›nochmals‹ lesen willst? Ich habe ihn ein Mal, mit ungeheurer Mühe, sechs Wochen lang, gelesen und zum schluß das Gefühl gehabt, daß von den 1200 Seiten 120 wertvoll sind. Hätt ich das vorher gewußt, so hätt ich meine kostbare Zeit an Bücher gewendet, von denen jede Seite wertvoll ist. Aber keine zehn Pferde werden mich je im Leben dazu kriegen, das Buch noch einmal aufzuschlagen. Meine Hochachtung vor Deiner Geduld.) マンの、エッセイ風の、芸術に関する発言が、すでにこの時点で、この側面から関心を持って観察されていることは、依然として注目に値する。そして、そのうえ、トゥホルスキーの読書の新たなアプローチの中では、『魔の山』をテーマの織物(Themengewebe)とみる察知能力も閃光を放っている。

ミュンヘンの作家ヨーゼフ・ポンテン(Josef Ponten)(1883-1940)は、国粹主義的な陣営に属していて、1924年12月中旬から七週間かけてこの小説を読み、そのことについて、何通かの手紙の中で、継続的に、マンに報告していた——この時点では、マンとポンテンの間には「熱意のこもった友情」(eifervolle Freundschaft)が結ばれていた。ただし、マンは、距離を置いて、この関係を要約している²⁾。その数年前に、ポンテンは、成立しつつある小説『魔の山』の一部を、マンに読んでもらい、例えば「天文学に関する一節」(astronomische Stelle)(513ffを参照)³⁾は、自分の提案によって「変更と抹消を施すことによって実質的に欠点のない」(durch Änderungen und Striche sachlich einwandfrei)(S. 52)ものになった、とみずからの貢献を認めるように要求した。ポンテンの手紙は、小説をめぐるその後の議論の中で、常に繰り返し一つの役割を演じるさまざまなモチーフを、前奏曲のような形で、先取りしている。1924年末に、ポンテンが、「あ、見える」(Mein Gott, ich sehe!)の章の中のレントゲンのシーンまでさしかかったとき、マンの言語の「魔術」(Zauber)に魅せられたことを明らかにしている。「いつも称賛する誘因と機会を与えてくれるあなたの言葉は、さらに輝きを増し、咲き誇り、そして何よりも鋭く、より完全なものになった、とほんとうに思います。どんな些細な状況も、その影も、影の影も、絶対と評してもよいほどの確で、説得力があり、余すところなく書き込まれていますし、描きこまれています。あなたの観察眼の鋭さは、賞賛に値します、驚嘆すべきものです——しかし、恐ろしくもあります。先日、『ブデンプロック家の人々』を読み返した

2) [原注] *Dichter oder Schriftsteller? Der Briefwechsel zwischen Thomas Mann und Josef Ponten 1919-1930*, hrsg. von Hans Wysling unter Mitw. von Werner Pfister, Bern 1988, S. 48ff.

3) [原注] テクストの数値データは、長篇小説の以下の版(Thomas Mann: *Der Zauberberg des Romans*, in: Th. M., *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1974, [GWと引用], Bd. 3)と関係づけられている。

ときにすでに感じたこと、そしてあなたにお伝えしたことは、つまり、あなたのまなざしの透徹する力、それがそこにもまたある！ ということです。」(Ich meine, Ihre Sprache, die man ja immer zu bewundern soviel Veranlassung wie Gelegenheit hatte, sei noch strahlender, blühender, namentlich aber schärfer u. völliger geworden. Jede kleinste Situation, ein Schatten von ihr, der Schatten des Schattens, ist unbedingt treffend, überzeugend, erschöpfend gegeben u. gemalt. Die Schärfe Ihrer Beobachtung ist bewundernswürdig, staunenswert — u. auch erschreckend. Das was ich schon neulich, bei einem Wiederlesen der Buddenbrooks, empfand u. wovon ich Ihnen zeugte: die Durchdringlichkeit Ihres Blickes, da ist sie wieder!) ポンテンは、自分自身を見て、不安な気持ちを感じている。「内側からあなたに見られているような気がするのです。まるで哀れなヨーアヒムが、神秘的な計量器の青白いスクリーンで、臆病だが好奇心旺盛なカストルプと陽気なベーレンスに見られているように。不気味であることは認めてください……」(Man fühlt sich von Ihnen im Innern beobachtet wie der arme Joachim vom zagen u. doch höchst neugierigen Castorp u. dem jovialen Behrens auf dem bleichen Schirm im geheimnisvollen Instrumentarium. Geben Sie zu, daß es unheimlich ist) ポンテンは、生を覚醒させるユーモラスな多様性を、マンの言語の正確さと同等と認める、がしかし、「僕と君との間の道徳的同一性」(moralische Identität zwischen Ich und Du) (49ページ)を独善的な厳格さで撤回する風刺家マンの矢のために、不透明な境界が存在することを嘆いている。ポンテンは、マンの合理性(Rationalität)ゆえに真の詩人的資質(Dichtertum)を、直前まで、公然と否認していたが⁴⁾、トーマス・マンのほうでは、ポンテンに対する潜在的な反感にもかかわらず、気軽に接していた。「造形、生、それは神秘です。例えば、ヨーアヒムは神秘です」(Plastik, Leben — ist Geheimnis. Joachim, zum Beispiel, ist ein Geheimnis) (50ページ)。1月の初め、ポンテンが、『魔の山』探検を続け、セテンブリーニとナフタとの論争の場面まで読み進んだとき、知的な論争によって繰り広げられる「アンチテーゼ〔対立概念を併置する対照法〕が示す深淵」(Antithesenabgründe[])が生じることを、みずからも証言している、そして、そのアンチテーゼによる深淵は、詩趣を帯びている、「つまりそうなるのは、情熱と精神的な苦悩が、あの〔セテンブリーニとナフタの〕大胆さを求める場合です」(wenn also Leidenschaftlichkeit u. geistige Not jene Kühnheiten diktierte)と述べている。技術的観点から、ポンテンは〔マンの〕小説の「構成方法」(Bauweise)を、連載小説のような緊張(Spannung)の積み重ねと「躊躇逡巡の発現という手段」(Mittel der Herauszögerung)に基づいていると見ており、その例として「ショーシャ夫人とのカストルプの愛の物語」(Liebesgeschichte des Castorp mit der Chauchat)——といってよければの話だが——を挙げている。「C.〔カストルプ〕による並外れてゆっくりとしたアプローチがまさにそれなのです！ 一步一步、それすらもおぼつかないほどに。

4) [原注] Josef Ponten, »Offener Brief an Thomas Mann«, in: *Deutsche Rundschau* (Okt. 1924) H. 201, S. 64 ff.; Teildr. Bei: Klaus Schröter (Hrsg.), *Thomas Mann im Urteil seiner Zeit. Dokumente 1891–1955*, Hamburg 1969, S. 110 ff.

そしてあのフランスの〔＝フランス語で愛の告白をした〕夜に、ついにショーシャのころを手にしたというのに、その後ずっと長くそのころを手にはありません。ショーシャ夫人は、最も繊細な方法でカストルプから遠ざかっていきます。」(Ein Außerordentlich langsames Ananarbeiten des C. ist das! Schritt für Schritt, u. nicht einmal das. Und wenn er sie nun endlich hat, an jenem faranzösischen Abend—dann hat er sie noch lange nicht. Sie entgleitet ihm auf die feinste Weise.) ポンテンは、ヨーアヒムを「絶對的に透明で(少なくとも僕にはそう見える)、ちょっと正しすぎて、もう絶望的に退屈な」(absolut durchsichtige 《so bilde ich mir wenigstens ein》, ein wenig gar zu korrekte u. schon hoffnungslos langweilige) 人物だと感じていながらも、小説の結末を「まさに」(geradezu)「胸をドキドキ」(Herzklopfen)させて待ち望んでいます(51ページ)。「雪」(Schnee)の章を読んだあと、11月11日に、ポンテンは、マンの「風景」(Landschaft)に対する「新たな征服」(Neuoberung)に熱狂している。「これは素晴らしいものです!そして、あなたのような透明な葉脈を持つ屋内の菩提樹が、どうして屋外のこのような恐ろしい〈自然〉(Natur)についてこれほど知っているのか、ただ不思議に思うばかりです。」(Das ist meisterhaft! Und man fragt sich nur, woher eine Zimmerlinde mit durchsichtigen Adern wie Sie soviel von dieser schrecklichen außerhäusigen ›Natur‹ weiß.) 今となって、肯定的な何かを求めるカストルプの姿の中に、当初は「最高度の宿命的耽美主義」(fataler Ästhetizismus im höchsten Grade)であったに違いない『魔の山』の中に、「断絶」(Bruch)が存在することを、ポンテンは実感する。「元来、教養小説などという言葉はまったく問題にはなっていないのです。もともと描かれていたものは、病人はよくならないのに、健康な人は病気になるという、享樂的な腐った世界だったのです。カストルプはこの世界に引き込まれ、最後には消えてしまうことになるのです。」(Ursprünglich war von Bildungsroman u. derlei gar keine Rede, das Ursprüngliche war die genießerische faulige Welt, in der zwar die Kranken nicht gesund, wohl aber die Gesunden karank werden. Dahinein soll der Castorp ogen werden u. schließlich verschwinden.) (53ページ以下) ポンテンは、1925年2月2日の最後を飾る手紙の中で、「『魔の山』はその種の傑作です!」(Der Zauberberg ist ein Meisterwerk seiner Art!)と総括している。「その種の」(seiner Art)——この制限を付ければ、マンに対して「明らかな冗長さ」(offenbare Länge[])を指摘することもできる。「例えば、生理学と生物学の現在の状態に関する章、僕がよく知っている茶色の不思議なケースの記述、ポーランド人の名誉棄損問題にかかわる係争——私がページを飛ばした唯一の場面!——は、疑いなくその例を示しています。」(wie sie das Kapitel über den gegenwärtigen Stand von Physiologie und Biologie, die Beschreibung der mir wohl bekannten braunen Wunderdose, den polnischen Ehrenhandel—das einzige Mal, wo ich eine Seite überschlug!—unzweifelhaft aufweist.) (60ページ) ポンテンの批判は、マンの小説の中に「何か麻痺させるようなもの、失望させるようなもの」を見出し、それが原因で、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)の『ヴィルヘルム・マイスター』(Wilhelm Meister)のポジティブな内容に及ばないと見なす点で、調停不可能なものとなる。

すなわち、「マンの精神的なものの中心は、卓越した能力によって、詩的に創造され、展開された、時間と死の理念に加え、（後から追加された）教養小説の概念に基づく、セテンブリーニとナフタという論争好きの人物を通じて描かれる、あらゆる時代、そしてわれわれの時代を含む世界観の闘争である。それは、表現の仕方においても、たぐいまれな壮大な闘争である。」（Das Zentrum seines Geistigen ist, neben der vorzüglich *dichterisch* erfundenen und durchgeführten Idee von Zeit u. Tod, der (später hinzugetretene) im Sinne des ›Bildungsromans‹ liegende gewaltige und in seiner Art der Darstellung wieder unvergleichliche Kampf der Weltanschauungen aller und auch unserer Zeit durch die Kampfhähne Settembrini und Naphta.) ポンテンは「生に敵対的な」(lebensfeindlich)という特徴づけを更新する。「しかし、この本では、生は死のためにあるように見えます。それは人を麻痺させるものです。私はこの本を読んだあと、これほど悲しくなったことはめったにありません。〔もちろん〕朗らかにさせてくれる個々の描写がとてもたくさん詰まっており、大声で笑わずにはいられないほどなのですが。生に敵対的なもののことは忘れるしかありません。そうでなければ、絶望して手をこまぬくことになります。」（Aber in der Buche scheint das Leben um des Todes willen zu sein. Das ist das Lähmende. Ich bin noch selten so traurig gewesen wie nach dem Lesen dieses Buches, ausgestattet mit so vielen erheiternden Einzelheiten, daß man laut auflachen muß. Man muß es vergessen, will man nicht verzagt die Hände in den Schoß legen.）(60ページ以下) 著者マンは、懐疑的な「生命への敵対性」(Lebensfeindlichkeit)が存在するという非難を、2月5日の「論争の結果」(Ergebnis der Redekämpfe)として退け、その反論として、「過激な理論をからかい、少なくとも、勇敢なヨーアヒムや、強大な力を発散する訥弁家ペーパーコルンといった人物を、そういう理論に対抗させる術を心得ているニヒリズム（それ以上に良いものを、時代は提供していません）が、——そもそも、正真正銘のニヒリズムと言えるのでしょうか？」(ob ein Nihilismus, der sich über extremistische Theorien lustig macht und ihnen immerhin Figuren, wie den tapferen Joachim und den großmächtigen Stammeler Peeperkorn entgegenzustellen weiß (Besseres liefert die Zeit nicht) – eigentlich ein so ganz echter Nihilismus ist?)と、問いかける。「死を喜劇的な人物」(den Tod zur komischen Figur)として描くことで、マンは「新たな人間愛の予感」(Ahnung neuer Humanität)を先取りした。少なくとも一時的にはあるが、カストルプには、「死との貴族的な結びつき（歴史、ロマンティシズム）と生への民主的な愛好との人間的な調和への洞察」([die] Einsicht in die menschliche Vereinbarkeit von aristokratischer Todesverbundenheit (Geschichte, Romantik) mit demokratischer Lebensfreundlichkeit) (63ページ以下)を授けられるのです。

この私的な議論には、〔古典のように円熟した完成美を模範とする〕擬古典主義にまだ抑圧されていないで、小説の挑発的な知性が率直な形で反映されている。マンは、この小説によって、作家としての経歴の転換点(Wendepunkt)に立っているのである。マンがみずからの立場を明確にする基本的なプロセスは、危機的な10年間を経て中断されるが、

自身が確立した民主主義の諸原則 (Maximen) を念頭に置きつつ、ますますはっきりとした立場を表明するようになる。その際、マンは、政治的には右派から (von den Rechten) 離反し、バランスを保つ必要性から、社会民主主義的なさまざまな観念 (sozialdemokratische[] Vorstellungen) に取り組む。「愛国的な若者を、私の方向へ動員することに成功した」 (gelungen, die nationale Jugend gegen mich mobil zu machen) (58ページ) と述べるポンテンに対抗して、マンは、この陣営における教育的な効果はもはや限定的にしか期待できない状況となっていることを苦々しく確認している。それゆえ、ヴォルフガング・シューマン (Wolfgang Schumann) のような人物にとって、『魔の山』は、すでに第一次世界大戦以前の代物 (Vorkriegsware) である。「『古書市場』のこの最新作は、1924年の出版であるが、1910年の出版物と言ってもよいような小説だ。」 (Das Neueste auf dem ›Markt der Alten‹ ist ein Roman, der genauso 1910 wie 1924 hätte erscheinen können.) この批評家は、『魔の山』を「ことごとく昨日の成果であり、昨日の症状を示すもの」 (zur Gänze Frucht und Symptom des Gestern) である、「しかし、その偉大さは、過ぎ去った世界としてわれわれの背後に残されている」 (dessen Größe aber hinter uns liegt als eine vergangene Welt)。それは、トーマス・マンの偉大な小説『魔の山』が終わるときは、世界の出来事のまさにその現場に足を踏み入れた者たち」 (jene, die die Welt betreten haben an d e r Stelle des Weltgeschehens, da Thomas Manns großer Roman *Der Zauberberg* endet.)⁵⁾ によって完結する、と見ている。ここからは、芸術のランクを前にした敬意と、中立化への意志の決意が読み取れる。

「若い芸術」 (Junge Kunst) は、ワイマル共和国のブレヒト (Bert[olt] Brecht) にとっても価値ある概念であり、みずからも旗手となる覚悟をしている。だから、1926年以来、トーマス・マンは、ブレヒトにとって黒い野獣 (betes noires) [=嫌悪の対象] となっている。1920年、アウクスブルクでの文学者の朗読会 (70 ff.) のあと、ブレヒトは、次のように記している。「数十人の肺結核患者の生活を、慎重に、決して形而上学的性格を欠かない形で描写しているこの小説は、死に対する一種の洗練された、あるいは素朴なゲリラ戦争を示している。同じもの、すなわち死を予想している多くの患者の共通性が独特の文化を、つまり〔死にかかわる〕一種重大な知識 (savoir mourir) を生み出し、これが場合によっては優雅な気品を見せて、深層に存在している困難をごまかしてしまう。」 (in sorgsamer und niemals der Metaphysik mangelnder Schilderung des Lebens einiger Dutzend Lungenkranker, eine Art raffinierten oder naiven Guerillakrieg gegen den Tod zeigt. Die Gemeinsamkeit vieler, die das gleiche erwarten, nämlich den Tod, zeitigt eine eigene Kultur, ein gewisse savoir mourir, vielleicht, das in seiner spielerischen Anmut über die in der Tiefe liegenden Schwierigkeiten hinwegtäuscht.)⁶⁾ 『犯罪小説に戻ろう!』 (*Kehren wir zu den Kriminalromanen zurück!*) の中で、ブレヒトは、同じ「死の場面」 (Sterbeszene)

5) [原注] Wolfgang Schumann, »Der Zauberberg«, in: *Kunstwart* 38 (Febr. 1925) S. 201.

6) [原注] Bertolt Brecht, *Gesammelte Werke in 20 Bänden*, Frankfurt a. M. 1967; hier Bd. 18, S.24 f., 28, 37 f., 49; vgl. Klaus Völker, *Bertolt Brecht. Eine Biographie*, München/Wien 1976, S. 108 ff.

を使って、マンの「安っぽいイロニー」(billige Ironie)に嫌疑をかけている。「どんな細部やその他の工夫も、トーマス・マンが、例えば、みずからの『魔の山』(題材として考察してみて)に精通しているということを、私に信じさせることはできないだろう」(Mit keinem Detail und mit keinem sonstigen Dreh wird mir Thomas Mann vortäuschen können, daß er zum Beispiel in seinem *Zauberberg* (als Stoff betrachtet) zu Hause ist.)。『老いし者たちへの言葉』(*Worte an die Alten*)では、「疫病からある種の生きる喜び」(Seuche einige Lebenslust)を得る「ブルジョワジーの悩み」(Sorgen der Bourgeoisie)の描写は、まったく不必要である。「これらの老いた人々は、その本来の目的から大きく逸脱した形式を利用しており、最も素晴らしい素材でさえ、ベストセラー本にすぎないものにしかならない。私に『魔の山』を理解することを求めることはできない! [……] 最初から、私には何も理解できない。この若い男性には何の感情の動きも起こらないし、私がこれまで見たこともないし、見たいとは決して思わなかったような人物だ。なぜ著者がその詳細に描写し(あるいは描写しすぎ)た女性を魅惑的と呼ぶのか、そして何よりも、なぜ著者は常に物事のよりもよって側面そのものに興味を持つのか、まったく理解できない。」(Diese alten Leute benützen Formen, die sich so sehr von ihrem ursprünglichen Zweck emanzipiert haben, daß die großartigsten Stoffe zu nichts Besserem mehr ausreichen als zu Bucherfolgen. Man kann von mir nicht verlangen, daß ich den „Zauberberg“ begreife! [...] Von Anfang an verstehe ich nichts mehr. Keine Regung dieses jungen Mannes, desgleichen ich nie gesehen habe oder nie hätte sehen mögen, nicht, warum jene genau beschriebene (oder besser beschriebelte) Frau vom Autor verführerisch genannt wird, und vor allem verstehe ich keinen Augenblick, warum den Autor immer gerade *die* Seite einer Sache interessiert!)『文書を作成する小さな助言として』(*Kleiner Rat, Dokumente anzufertigen*)の中では、「古い世代」(ältere Generation)への攻撃と、トーマス・マンの書籍の出版を阻止したいという願望とが結びついている。重要なのは、「若い人たちが年配の人たちの作品に対して抱く、言葉では言い表せないほど、まったくもって真実で、ごく単純な物理的な嫌悪感」(der unbeschreibliche durch und durch wahrhaftige, ganz einfach physische Ekel unserer jungen Leute vor den Erzeugnissen der älteren)であり、偶然の代表例は重要ではない。「私がマンを取り上げるのは、マンが人工的で虚栄心にあふれた、無用な本を作るブルジョワ的な出版社の最も成功した典型的な人物だからだ。」(Ich greife Mann lediglich heraus, weil er der erfolgreichste Typ des bürgerlichen Herstellers künstlicher, eitler und unnützer Bücher ist.)ブルジョワであるということは、搾取機構の一部であることを意味する。そのため、1930年に創作され、1934年に最初の亡命作品集『歌、詩、合唱曲』(*Lieder Gedichte Chöre*)に収録された『世界の承認についてのバラード』(*Ballade von der Billigung der Welt*)には、次のような一節がある。

作家は私たちに自作の魔の山を読ませてくれる。

作家が(お金のために)そこで語っていることは、うまく語られている!

作家が（無駄なことなのに）黙っていること：それこそが真実だったかもしれない。
私は言う：この男は盲目なのだ，買取されてはいないけれど。

Der Dichter gibt uns seinen Zauberberg zu lesen.
Was er (für Geld) da spricht, ist gut gesprochen!
Was er (umsonst) verschweigt: die Wahrheit wär's gewesen.
Ich sag: Der Mann ist blind und nicht bestochen.⁷⁾

ワイマル共和国最後の八年間の構図は固定化されており，トーマス・マンのその構図における立場は、『魔の山』、『マールリオと魔術師』（*Mario und der Zauberer*）（1930年）という小説，そして随筆によって定義づけられている。マンは，この共和国を正当化できる数少ない作家の一人であり，それゆえ，共和国を擁護し保護する権利も有している。若い世代のさまざまな異議申し立てに対抗するために，マンは『魔の山』には知的に今日的意義があるという主張を繰り返し強調してきた。「昔むかし，戦前の世界」（alten Tagen, der Welt vor dem Kriege）（9ページ）という「もうすっかり歴史という青さび」（schon ganz mit historischem Edelrost）に覆われた物語と，最新の議論との歴史的な隔たりを埋めるために，「密封された歴史」（hermetische[] Geschichte）の最後の段落は，ハンス・カストルプが次のようにほのめかしている。「君が味わった肉体と精神の冒険は，君の単純さを高め，君が肉体においてはおそらくこれほど生き永らえるべきではなかったろうに，君をなお精神の世界において生き延びさせてくれたのだ」Abenteuer im Fleische und Geist, die deine Einfachheit steigerten, ließen dich im Geiste überleben, was du im Fleische wohl kaum überleben sollst.）（94ページ）。批評家ユーウス・バープ（Julius Bab）への手紙の中で，マンはこう説明している。「ハンス・カストルプは，結局のところ，予感するタイプの人間であり，先駆者であり，先取りをする人間であり，戦前の小さなドイツ人であり，〈高揚〉によって先見の明を持つようになった人間である。」（Hans Castorp ist am Ende ein Vortypus und Vorläufer, ein Vorwegnehmer, ein kleiner Vorkriegsdeutscher, der durch „Steigerung“ zum Anticipieren gebracht wird.）主人公の発展能力（Entwicklungsfähigkeit）に，マンは，執筆中に，「私は，戦争の前にすでに戦争を乗り越えた若いドイツ人について書いています」（Ich schreibe von einem jungen Deutschen, der vorm Kriege schon über den Krieg hinauskommt.）⁸⁾という熟慮を付け加えた。マンは公の場でもこの点を強調している。デンマーク最大の新聞とのインタビューで，この本について「多くの時事問題，政治的な問題にも触れている」（Es berührt viele aktuelle Dinge, auch politische.）⁹⁾と語っ

7) [原注] Brecht, 同書, Bd. 9, S. 472.

8) [原注] *Thomas Mann. Briefe*, hrsg. von Erika Mann, 3 Bde., Frankfurt a. M. 1961-65, hier Bd. 1, S. 239 (23. April 1925).

9) [原注] Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.), *Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann 1909-*

ている。内面的な教育効果という考えは、外部に向けた宣伝的視点によって補完されている。フェリックス・ベルトー (Félix Bertaux) に対して、彼はこの小説が「知的なヨーロッパに、ドイツの精神的・心因的な状況について有益な情報を提供できる」(dem intellektuellen Europa nützliche Aufschüsse über die geistig-seelische Verfassung Deutschlands geben könnte)¹⁰⁾ ことを期待している。

時の小説〔時代小説/時間小説〕(Zeitroman) を、現在という一回限りの存在を題材や内容として本質的に表現する小説類型 (Romantypus) と定義するならば、『魔の山』は、伝統的に「19世紀を特徴づける」(charakteristisch für das 19. Jahrhundert) ものと理解されているこの類型に属する作品であるといえるであろう¹¹⁾。この類型に組み入れられるものには、とりわけ次のような作品が挙げられる。ハインリッヒ・ラウベ (Heinrich Laube) の『若いヨーロッパ』(*Das junge Europa*) (1833-37年)、カール・レベレヒト・インマーマン (Karl Leberecht Immermann) の『エピゴーネンたち (末裔たち)』(*Die Epigonen*) (1836年)、『ミュンヒハウゼン』(*Münchhausen*) (1837/39年)、トーマス・マンが子供の頃から親しんだフリッツ・ロイター (Fritz Reuter) の『わが農民時代より』(*Ut mine Stromtid*) (1863 [1862]/64年)、グスタフ・フライターク (Gustav Freytag) の『借方と貸方』(*Soll und Haben*) (1855年)、カール・フェルディナント・グツコウ (Karl Ferdinand Gutzkow) の『精神の騎士たち』(*Die Ritter vom Geiste*) (1850/51年) および『ローマの魔術師』(*Der Zauberer von Rom*) (1859年から1861年)、ヴィルヘルム・ラーベ (Wilhelm Raabe) の『アブ・テルファン』(*Abu Telfan*) (1868年)、『魔の山』の執筆中に読んだゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller) の『マルティーン・ザランダー』(*Martin Salander*) (1886年)、そして、——マンにとって特に重要な——テオドール・フォンターネ (Theodor Fontane) の晩年の小説がこの分類に属する。その中の『エフィ・ブリースト』(*Effi Briest*) (1895年) では、時代の問題が名誉の問題として、『ポッゲンブール家』(*Die Poggenpuhls*) (1896年) と『シュテヒリン湖』(*Der Stechlin*) (1899年) では貴族の問題として浮き彫りにされている。時の小説 (Zeitroman) の分野で萌芽を示すものとしては、すでに、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*) (1774年) における、貴族社会から追放されたヴェルテルの物語、また『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』(*Wilhelm Meisters theatralische Sendung*) (1777年初稿、没後1911年に出版) における、国民を人間的に形成する目標を構想する作品があり、さらに、クレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano) の『ゴドヴィ』(*Godwi*) (1801年)、あるいはアーヒム・フォン・アルニム (Achim von Arnim) の『ドロレス伯爵夫人〔の貧と富と罪と贖い〕』

1955, Hamburg 1983, S. 68 (16. Dezember 1924).

10) [原注] *Dichter über ihre Dichtungen*. Thomas Mann, hrsg. von Hans Wysling unter Mitw. von Marianne Fischer, 3 Bde. Frankfurt a. M. 1975-81, hier Bd. 1, S. 485 (25. Januar 1925).

11) [原注] Hildegard Emmel, »Roman«, in: *Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte*, hrsg. von Paul Merker und Wolfgang Stammeler, Bd. 3, hrsg. von Werner Kohlschmidt und Wolfgang Mohr, 2. Aufl. Berlin/New York 1977, S. 490 ff., hier S. 506 ff.

(*Gräfin Dolores*) (1810年) などの、革命戦争によって荒廃したラインガウ地方を描いた作品が挙げられるかもしれない。とすれば、それ以後、例えばハインリッヒ・ベル (Heinrich Böll) の小説、ウーヴェ・ヨーンゾン (Uwe Johnson) の『記念の日々』 (*Jahrestage*) (1970-83年)、ギュンター・グラス (Günter Grass) の『ひらめ』 (*Butt*) (1977年)、『女ネズミ』 (*Die Rättin*) (1986年)、ジークフリート・レンツ (Siegfried Lenz) の『郷土博物館』 (*Heimatmuseum*) (1978年)、マルティン・ヴァルザー (Martin Walser) の小説などを思い起こせば、時の小説は、ドイツ現代文学の生き生きとした伝統を体現しているといえるだろう。

『魔の山』と『ファウストゥス博士』は、この伝統への架け橋となっているが、『魔の山』はさらに、時の小説という追加的な意味合いも持っている。すなわち、『魔の山』は、語られる時間 (erzählte [Zeit]) と語る時間 (Erzählzeit) として、集団的および個人的な時間感覚として、「沈黙の姉妹」 (Stumme Schwester) である時間 (131ページ) を測定して知覚することができるために人間の内面に欠けている器官の主観的および客観的な時間 (751ページ) として、有限性と不死として、歴史意識、現代の危機、そして未来構想へのアプローチとして、時間をテーマとしている¹²⁾。

『魔の山』の構想とその実現化との間には、十二年間という激動の年月が存在しており、時代の転換期 (Zeitenwende) を飛び越えている——それをどのように捉えるにせよ。オーストリア皇太子夫妻の暗殺と、広範な市民層を貧困に陥れた〔第一次〕世界大戦が始まり、ドイツは平穏を取り戻すことはなかった。休戦、革命による君主制の打倒、〔ワイマル〕共和国の樹立、反革命義勇軍による戦闘、アルザス・ロレーヌ地方と植民地の割譲に関するヴェルサイユ条約、戦争責任の承認、1930年まで続いたライン川左岸の占領、ルール地方での闘争、そしてインフレーション、これらは、大まかなキーワードにすぎない。外交政策に関しては、ロシア革命、日本とアメリカ合衆国の台頭、ラパロ条約〔=1922年の独ソ修好条約〕によるドイツのロシアへの接近などのキーワードが補足できる。『魔の山』では、これらの出来事は間接的にしか反映されていないが、他方、『ファウスト博士』では、「今日では、深く地に潜んでしまったように思われるあの審美主義的文化の時代」 (jener ästhetischen Kulturepoche, die heute so tief versunken scheint) (GW 6, 345, 第26章) からの決別が、——ツァイトブロームがレーヴァーキューンと過ごした夏休み (同書, 291, 第24章) から1924年の終わり (同書, 第39章) まで——、具体的に言及されており、

12) [原注] Richard Thieberger, *Der Begriff der Zeit bei Thomas Mann. Vom »Zauberberg« zum »Joseph«,* Baden-Baden 1952; Hans Robert Jauss, »Die Ausprägung des Zeit-Romans in Thomas Manns »Zauberberg« und James Joyces »Ulysses«, in H. R. J., *Zeit und Erinnerung in Marcel Prousts »A La recherche du temps perdu«.* Ein Beitrag zur Theorie des Romans, Heidelberg 1955, S. 35 ff.; Ulrich Karthaus, »Der Zauberberg« – ein Zeitroman«, in: *Deutsche Vierteljahresschrift* 44 (1970) S. 269 ff.; Werner Fritzen, *Zaubertrank der Metaphysik. Quellenkritische Überlegungen im Umkreis der Schopenhauer Rezeption Thomas Manns*, Frankfurt a. M. 1980, S. 134 ff., 201 ff. (Langeweile).

いくつかの自伝的な事柄が暗号化される形で、著者の経験の重圧を具体的に表現している。この時代の変化は、著者の意図の変化として、『魔の山』の成立過程にも見られる。最も重要な変化は、短篇小説から長篇小説への発展、風刺・ユーモアのある着想から時の小説〔時代小説/時間小説〕への拡大、セテンブリーニの戯画化された人物像からアイロニカルなだけの人物像への変化、当初ブンゲ牧師¹⁾と呼ばれていたもう一人の論争好きの人物に共産主義的な世界観を与えたこと、カストルプが単なる客体から探求する主体へと変化したこと、宇宙にまで及ぶ自然科学的な世界観を獲得したこと、である。

トーマス・マンは、この小説の着想のきっかけについて、みずから公の場で何度か言及している。もちろん、アメリカの〔プリンストン大学の〕学生たちに向けた講演「『魔の山』入門」(*Einführung in den „Zauberberg“*) (1939年)でも触れている。それによると、イエッセン博士 (Dr. Jessen) の療養所に数か月間滞在しなければならなかった妻カティア (Katia) を、マンは、1912年5月から6月にかけて3週間、ダヴォースで訪ね、そこから「奇妙な印象」(*wunderliche Eindrücke*) を持ち帰った (GW 11, 604 ff.)。カティアの失われた手紙によってわかることは、すぐに「短編小説」の計画が立案されたようで、マンの9冊目のノートには、『魔法にかけられた山』(*Der verzauberte Berg*)¹³⁾ がみずからの課題として数え入れられている。しかし、まず著者は『ヴェニスに死す』(*[Der] Tod in Venedig*) を完成させ、中断していた小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(*Bekenntnisse [des Hochstaplers] Felix Krull*) に戻った。1913年7月中旬、イタリア旅行からミュンヘンに戻った後、ゲオルゲ (Stefan George) ・サークルの文学研究家エルンスト・ベルトラム (Ernst Bertram) に宛てた7月24日付の手紙から、この作品は「『ヴェニスに死す』の一種のユーモラスな対照物」(*[eine] Art von humoristischem Gegenstück zum ›Tod in Venedig‹*) となる作品に決定したことがわかる¹⁴⁾。あるインタビューでは、8月にすでに「現在、マンは『ルントschau [Rundschau 展望]』誌のために小説を執筆中である」と知らされていた¹⁵⁾。いずれにせよ、このタイトルは年末までに決定する予定であり、マンは「ダヴォース短篇小説」(*Davoser Novelle*) が「まだ完成にはほど遠い」(*noch lange nicht fertig*) ことをすでに認識している¹⁶⁾。〔第一次〕大戦勃発後、マンは歴史・政治に関する

1) 〔訳注〕「ブンゲというプロテスタントの牧師はもともと『魔の山』のセテンブリーニの相手役に予定されていたが、のちにユダヤ人との混血でイエズス会士のレーオ・ナフタにとって代えられた。『魔の山』の資料と下準備は失われたので、ブンゲの人物像の構想については、一九一九年から二一年までの日記がわずかながら伝えてくれる以上のことはわからない。」(トーマス・マン『トーマス・マン 日記 1918-1921』森川俊夫・伊藤暢章・須崎恵三・前田良三訳 紀伊國屋書店 2016年 255ページ。(Thomas Mann: *Tagebücher. 1918-1921*. Farnkfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 1979, S. 659) [Tb, 14.4.1919]

13) 〔原注〕*Thomas Mann. Notizbücher*, hrsg. von Hans Wysling und Yvonne Schmidlin, 2 Bde. Frankfurt a. M. 1991-92, hier Bd. 2, S. 7-14.

14) 〔原注〕*Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955*, hrsg. von Inge Jens, Pfullingen 1960, S. 18.

15) 〔原注〕Hansen/Heine (Anm. 9) S. 33.

著作、たとえばまばゆいほど危険な『フリードリヒと大同盟』(*Friedrich und die große Koalition*)などで自分の職分を全うしたものの、1915年の春には「物語」(*Erzählung*)に戻った。1915年5月、作家コルフィッツ・ホルム(Korffiz Holm)宛ての手紙に「長篇小説」(*Roman*)¹⁷⁾という表現が登場するが、マンは、その秋に『非政治的人間の考察』(*Betrachtungen eines Unpolitischen*)の執筆を開始し、小説の執筆は断念している。

この最初の段階の内容をより正確に決定するためのいくつかの手がかりがある。例えば、マンは日記の中で、詐欺師小説とサナトリウム〔[結核]療養所〕小説とのあいだのテーマの類似性について、『魔の山』における死のロマン主義と生の肯定、詐欺師のプロテスタント主義(*die Todesromantik plus Lebensja im Zauberberg, den Protestantismus des Hochstaplers*)¹⁸⁾という、よく知られた補足表現で、定式化して表現している。1915年に友人である教師に宛てた手紙は、この枠組みを最も具体的に示している。

戦争が勃発するまえ私は、高地にあるさる結核療養所を舞台にしたかなり大部な小説を書き始めていました。それは、教育的・政治的な根本意図を持った物語で、主人公である若い男は、誘惑的な力としての死との対決という課題を背負われ、人道主義とロマン主義・進歩と反動・健康と病気などといういくつかの精神的対極のあいだを、滑稽と戦慄のまじったやり方で——案内されることになっています。作品全体の精神はユーモア的かつ虚無的なもので、どちらかと言うと死への親近感の方向に傾いています。『魔の山』という題のこの作品には、七年間が七日にしか感じられなかったという〔ヴィルヘルム・ハウフ(Wilhelm Hauff)の〕『小人の鼻吉』(*Zwerg Nase*)的なところがいくぶん入っており、最後の解決は——戦争の勃発にするほか手はないと考えています。

Ich hatte vor dem Kriege eine größere Erzählung begonnen, die im Hochgebirge, in einem Lungenanatorium spielt, — eine Geschichte mit pädagogisch-politischen Grundabsichten, worin ein junger Mensch sich mit der verführerischsten Macht, dem Tode auseinanderzusetzen hat und auf komisch-schauerliche Art durch die geistigen Gegensätze von Humanität und Romantik, Fortschritt und Reaktion, Gesundheit und Krankheit geführt wird, aber mehr orientierend und der Wissenschaft halber, als entscheidend. Der Geist des Ganzen ist humoristisch-nihilistisch, und eher schwankt die Tendenz nach der Seite der Sympathie mit dem Tode. *Der Zauberberg* heißt es, etwas vom Zwerg Nase, dem sieben Jahre wie Tage vergehen, ist darin, und der Schluß, die

16) [原注] *Dichter über ihre Dichtungen* (Anm. 10), S. 452; vgl. Peter de Mendelssohn, *Der Zauberer. Das Leben des deutschen Schriftstellers Thomas Mann, Erster Teil: 1875–1918*, Frankfurt a. M. 1975, S. 892 ff., 938 ff.

17) [原注] *Briefe* (Anm. 8), Bd. 1, S. 120.

18) [原注] *Thoms Mann. Tagebücher 1918–1921*, hrsg. von Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1979, S. 5 (14. September 1918).

Auflösung, — ich sehe keine andere Möglichkeit, als den Kriegsausbruch.¹⁹⁾

『非政治的人間の考察』への転換点において書かれたこの作品には、小説との密接な関連性を認識させる政治的考察がひしめき合っている。トーマス・マンはのちに、この長大な随筆によって小説がどれほど不必要な要素から解放されたかを繰り返し指摘している。前述の手紙からは、小説の構想が伝播していくという逆のプロセスも見取れる。著者は、自分が奇妙だと感じる西洋の魅力、自分の年齢について論じている。「世界政治および文明の領域で正統性を代表しているだけに、これら「西側の諸国は、貴族主義的な印象を与えます。そして、私は思うのですが、われわれドイツ人のあいだに盛んな——民主主義的な動機に基づくと称する——西側諸国への共感の一部は、実際には貴族主義的な共感、古くて高貴な滅びゆく世界への共感であり、ロマン主義であり、「死への共感」なのです。」(Indem sie die weltpolitische und civilisatorische Legitimität vertreten, wirken sie aristokratisch, und ich glaube, daß manche Sympathie, die, angeblich aus demokratischen Motiven, bei uns für den Westen lebendig ist, in Wahrheit aristokratische Sympathie, Sympathie mit alten, noblen, sinkenden Welten, Romantik, ›Sympathie mit dem Tode‹ ist.)²⁰⁾「ヨーロッパの社会的再組織化」(sozialen Neuorganisation Europas)という中心的な課題に関しては、「ドイツが新しい未来に対して提供すべきもの」(das, was Deutschland dem Neues entgegenzustellen hat)は「まだ形を整えていないし」(noch nicht formuliert),「当面は形を整えにくい」(vorderhand schwer zu formulieren)ものの、東側には高貴で静的なものを、西側には社会的で動的なものを代表する、ドイツの中道というイメージがすでに形成されつつある。『考察』自体では、プフィッツナー(Hans Pfitzner)の『パレストリーナ』(*Palestrina*)と、「魂の観念複合体全体」(ganze seelische Komplexe)を統合する「死への共感」(Sympathie mit dem Tode)とに関連して、「一編のささやかな長篇小説」(ein[] klein[er] Roman)について言及されている。つまり「それは、一種の教育的な物語であって、道徳的に危険な滞在地に漂着した〔/抜け目のない〕一人の若者が、いずれも同じように変わったところのある二人の教育者、すなわちイタリア人の文士であり、人文主義者であり、雄弁家であり、進歩主義者である男と、なんとなく怪しげな神秘主義者にして反動家にして反理性の代弁者である男とのあいだに立たされるという話である、——この善良な若者は、美德と誘惑という二つの力のうちどちらかを、生への義務および奉仕と、心のどこかで強く惹きつけられるところのある腐敗の魅力のうちのどちらかを、選ぶはめになる。」(eine Art von pädagogischer Geschichte, in der ein junger Mensch, verschlagen an einen sittlich gefährlichen Aufenthaltsort, zwischen zwei gleichermaßen schnurrige Erzieher gesellt wurde, zwischen einen italienischen Literaten, Humanisten, Rhetor und Fortschrittsmann und einen etwas anrühigen Mystiker, Reaktionär und

19) [原注] Thomas Mann. *Briefe an Paul Amann 1915–1952*, hrsg. von Herbert Wegener, Lübeck 1959, S. 29 ff. (3. August 1915).

20) [原注] 同書に

Advokaten der Anti-Vernunft, – er bekam zu wählen, der gute Junge, zwischen den Mächten der Tugend und der Verführung, zwischen der Pflicht und dem Dienst des Lebens und der Faszination der Verwesung, für die er nicht unempfänglich war.〔下線は訳者による〕²¹⁾ このエッセイの一場面は、「魔の山」の第三の登場人物、ペーパーコルンを予見している。そこ〔「政治」の章〕では、啓蒙主義的な薬剤師とキリスト教の田舎司祭が、論争の末、「エンマの死体」(Emmas Leiche)の前で疲れ果てて眠りに落ち、夫シャルルがようやく別れを告げる、フロバール (Gustave Flaubert) の『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*) (1856年)の場面が引用されている。

〔翻訳 (2) に続く〕

【テキスト】

Volkmar Hansen: *Hans Castorps Weg ins Freie oder »Der Zauberberg« als Zeitroman*. (1) In: Interpretationen. *Romane des 20. Jahrhunderts*. Band 1. Universal-Bibliothek Nr. 8808. Stuttgart: Philipp Reclam jun. GmbH & Co. 1993, S. 55–69.

【付記】

〔……〕内は訳者注。

【原著者による使用参考テキスト】

- Thomas Mann: *Der Zauberberg. Roman*. 2 Bde. Berlin: S. Fischer 1924.
- *Gesammelte Werke (in Einzelausgaben)*. Berlin: S. Fischer 1922–35/ Wien: Bermann-Fischer 1936–37. [*Der Zauberberg*, 1924.]
- *Gesammelte Werke in zwölf [seit 1924: dreizehn] Bänden*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1960–74. 2., durchges. Aufl. 1974. [Zit. als: GW: *Der Zauberberg* in Bd. 3] – [Neuausg. u. d. T.:] *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Hrsg. von Hans Bürgen und Peter de Mendelssohn. Frankfurt a. M.: Fischer Taschenbuch Verlag 1990.
- *Gesammelte Werke in Einzelbänden* (Frankfurter Ausgabe). Hrsg. von Peter de Mendelssohn. 20 Bde. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1980–85. [*Der Zauberberg*, 1981, mit einem Nachw. von Peter de Mendelssohn.]
- *Der Zauberberg. Roman*. Durchges. Neuauf. [Mit Übers. der fremdspr. Textstellen ins Dt.

21) 〔原注〕 Thomas Mann, *Betrachtungen eines Unpolitischen*, Berlin 1918, S. 426, 205 f. 「道に迷った」(vom Weg abgekommen) と同系統の「漂着した」(verschlagen) という意味と、「狡猾である」(listig) と同系統の「抜け目のない」(verschlagen) という意味からなる二重の意味の使用 (die doppelstinnige Verwendung) は、ハンス＝マルティン・ガウガー (Hans-Martin Gauger) によって言及された〔言語〕層 (Schicht) のひとつである (»*Der Zauberberg*“ – ein linguistischer Roman«, in: H.-M. G., *Der Autor und sein Stil*, Stuttgart 1988, S. 170 ff.).

von Helmut Bartuschek.] Frankfurt a. M.: Fischer Taschenbuch Verlag 1991.

【原著者による研究文献】

- Fritzen, Werner: „Zauberberg“ der Mataphysik. Quellenkritische Überlegungen im Umkreis der Schopenhauer-Rezeption Thomas Manns. Frankfurt a. M. 1980.
- Heftrich, Eckhard: *Zauberbergmusik. Über Thomas Mann*. Frankfurt a. M. 1975.
- Koopmann, Helmut: *Die Entwicklung des ›intellektuellen Romans bei Thomas Mann. Untersuchungen zur Struktur von „Buddenbrooks“, „Königliche Hoheit“ und „Der Zauberberg“*. 2. Aufl. Bonn 1971.
- Kristiansen, Børge: *Form-Unform-Überform. Thomas Manns „Zauberberg“ und Schopenhauers Mataphysik*. Kopenhagen 1978.
- Reidel-Schrewe, Ursula: *Die Raumstruktur des narrativen Textes. Thomas Manns „Der Zauberberg“*. Würzburg 1992.
- Sandt, Lotti: *Mythos und Symbolik im „Zauberberg“ von Thomas Mann*. Berlin 1979.
- Saureßig, Heinz (Hrsg.): *Besichtigung des „Zauberbergs“*. Biberach a. d. Riß 1974.
- Seitz, Gabriele Hrsg.): *„Der Zauberberg“. Ein Film von Hans W. Geißendörfer nach dem Roman von Thomas Mann*. Frankfurt a. M. 1982.
- Trummer, Beatrice: *Thomas Manns Selbstkommentare zum „Zauberberg“*. Konstanz 1992.
- Wolff, Rudolf(Hrsg.): *Thomas Mann. Aufsätze zum „Zauberberg“*. Bonn 1988.
- Weigand, Hermann: *Thomas Mann's Novel. „Der Zauberberg“*. New York 1933 (Reprint 1971).
- White, James F. (Hrsg.): *The Yale „Zauberberg“—Manuskript. Rejected Sheets Once Part of Thomas Mann's Novel*. Bern/München 1980.
- Wißkirchen, Hans: *Zeitgeschichte im Roman. Zu Thomas Manns „Zauberberg“ und „Doktor Faustus“*. Bern 1986.

【訳者による参考文献】

トーマス・マンの作品・関連文献からの引用（訳文）に関しては、下記邦訳を参照させていただいた。

- 『トーマス・マン全集』全13巻（12巻＋別巻）新潮社 1971-72年
- トーマス・マン『魔の山』（筑摩世界文学体系61）佐藤晃一訳 筑摩書房 1971年
- トーマス・マン『魔の山』Ⅰ・Ⅱ（世界文学全集 67・68）圓子修平訳 1980年
- トーマス・マン『魔の山』上・下 関泰祐・望月市恵 岩波文庫 ³1990年
- トーマス・マン『トーマス・マン 日記』（1918-1921年, 1933-1955年）全10巻 紀伊國屋書店 1985-2014年
- トーマス・マン『非政治的人間の考察』上・中・下 前田啓作・山口友三訳 筑摩書房

1968-1971年

- 樋口忠治: *Higuchi GM Corpus. Text database von J. W. Goethe und Thomas Mann*. Supported by the Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University. (Access Number 19620. This site was opened on April 1st, 1999 and moved to the flc domain on April 14th, 2016)
- 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1971年
- 田中秀央・落合太郎編著『ギリシア・ラテン引用語辞典』新增補版 岩波書店 1979年
- Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Hrsg. von. Heinrich Detering, Eckhard Heftrich, Hermann Kurzke, Terence J. Reed, Thomas Sprecher, Hans Rudolf Vaget und Ruprecht Wimmer. Frankfurt a. M.: S. Fischer 2001 ff. (=GKFA)
- Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Hrsg. von. Hans Bürgin und Peter de Mendelssohn. 2. Auflage. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1974. (=GW)
- Thomas Mann: *Dichter über ihre Dichtungen*. 3 Bde. Hrsg. von. Hans Wysling und Marianne Fischer. Zürich/München/Frankfurt a. M.: Heimeran 1975-1981. (=DüD)
- Thomas Mann: *Essays*. Hrsg. von Hermann Kurzke und Stephan Stachorski. 6 Bde. Frankfurt a. M.: S. Fischer. 1993-1997.
- Thomas Mann: *Notizbücher* 1-6 und 7-14. Hrsg. von Hans Wysling und Yvonne Schmidlin. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1991/1992.
- Thomas Mann: *Tagebücher 1911-1921 und 1933-1943*. Hrsg. von. Peter de Mendelssohn. *Tagebücher 1944-1955*. Hrsg. von Inge Jens. 10 Bände. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1977-1995. (=Tb)
- Thomas Mann: *Briefe. Bd. I: 1889-1936, Bd. II: 1937-1947. Bd. III: 1948-1955 und Nachlese*. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1961-1965. (=Br)
- Thomas Mann: *Die Briefe Thoma Manns. Regesten und Register*. Bd. I. 1889-1933. Bearbeitet und herausgegeben, unter Mitarbeit von Yvonne Schmidlin (Thomas Mann-Archiv) von Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer. Mit einem Vorwort von Hans Wysling. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1976. (=Reg)
- Thomas Mann: *Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955*. Hrsg. von Inge Jens. Pfullingen: Neske 1960. (=BrB)
- Hans Bürgin/Hans Otto Mayer (hrsg.): *Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1965.
- Gert Heine/Paul Schommer (Hrsg.): *Thomas Mann Chronik*. Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann GmbH 2004.